

# 婦人と子ども

## 歳暮雑感

### 干渉と自由

ものは考へようである。菊が一つ咲いたにして、菊の方に斯う美しく咲く力があつたから咲いたのだとも考へられる。菊つくりが斯くも丹精したからだとも考へられる。勿論常に靜に正しくものを考へる人は、此の二つの條件を、どちらも忘れずに居る。實際兩條件が揃はないで、こんな美しい花が咲く筈はないのである。

ものは大抵程度問題である。元來が良種の菊ならば、そう骨を折らないでも美事に咲く。それ程

の種でない菊を、菊作りの腕で上花に咲かさうとするには、並以上、人一倍の手入れがいる。到底駄目な花ならば、流石の名手も、先づ大抵に見切りをつけなければならぬ。が、いづれにしても菊をつくるに丹精がいらぬ。世話がいらぬといふものではない。

斯う理詰めに筆を分けていけば、幼児教育上の所謂干渉主義も所謂自由主義も、ものは考へよう。ものは程度の話といふことが分る。それ以上別に論はないのであるが、實際はそう分つて居ない。

第一、その人の性分といふものがある。理論は

理論で、なんだか干渉に傾むく人がある。自由に任せて平氣な人がある。どちらが親切、不親切、いづれが熱心、不熱心といふことはなく、たゞそのいふ流義々々がある。性急な人と悠々たる人の違ひのようなもので、一方から見れば一方が氣に在るまい。一方から見れば一方が餘計なことに思へよう。しかし性急の人必ずしも悠々の人よりも事に忠なりといふ譯ではない。悠々の人必ずしも性急の人よりも事に無頓着といふのではない。干渉せずに居られない人がある。餘り干渉しては悪いと思ひつゝ、つい手を出し口を挟まずに居れない人がある。もう少し干渉をした方がと氣がついて居ても、いゝ加減で平氣でいられる人がある。そう細々と出来ない人がある。——理論は後からで、實際の根底は斯ういふ性分の差から出て居るものが案外多く又強い。

第二、その人の學問の傾きから差の起ることが

ある。元來教育の學問は教育者の方の問題と、被教育者の問題と、雙方が相俟つて始めて完きものである。そうある筈のものである、處が此の二つの門の孰れから入つたといふことによつて、何となく其の人の研究の色合ひに別がつく。但し之れからはそんな不條理な區別は段々出来なくなる筈である。次第にそういふ方に向ひつゝある。しかし今迄の處では何となく此の區別が分れて居る。教育の目的とか、教授法とか所謂教育學の正門から入つた人は、どうしても教育者の方の側に考へが加たよつてゆく。近頃の兒童研究とか、生物學的發達論とか、所謂教育學の裏門（今迄の處では裏門といふ札がかけられてある）から入つた人はどうしても被教育者たる兒童の方に考へを餘計おく。而して前者が干渉主義になり易く、後者が自由主義になり易い傾向を有することは明かである。斯うしたいと思ふのと、斯うなると思ふのと、一

寸した處で天秤がどつちかへ傾く。

第三、こんなことが識らず／＼の中に因となつてつい論もすれば、何となく旗も紅白にする。相對さなければ何でもないものが、相對するによつて、いよ／＼別をなすは常のことである。紅は白によつていよ／＼紅く、白は紅によつていよ／＼白く、且つまたそこに、妙な片意地も交つて來て論はいつでも旗の立て合ひになる。そうしては實際何を争つて居るのか忘れて、たゞ旗ゆるに睨みあふようになる。お前のは餘り紅過ぎる。お前のは餘り白過ぎる。之れが大抵の時の云ひ合ひである。

今年、吾人は多く幼児教育上の自由主義を説いた。随分極端かと思ふ言辭さへ用ゐて説いた。フレーベルの恩物論を批評したり、自由遊びを主張したり、モンテッソーリ教育法を紹介したり、時

には自分でも言ひ過ぎるかと思つた。心ある方々は餘りだと思はれたこともあつたかも知れない。中には理屈過ぎると冷笑された方もあつたかも知れない。或はまた極端から極端へ飛んで密に感ふ處のあつた方々もあつたかも知れない。現にそういふ御忠告も頂いた。そういふ訴へも受けた。疑惑の囁きも聞いた。それ程迄に自由主義を説いたのである。

併し之れは紅旗に對して白旗を用ゐた次第である。源氏の白旗で敢て勝ちを争ふたといふ譯ではないが、因襲的勢力の強い紅旗には、成るべく眞白な白旗を強く／＼振りかざす必要があると思つたのである。

けれども之れは相對すればこそ敵となり味方となるいささつである。いくら強く自由主義を執つたからとて、菊つくりなしで、いゝ花が咲くものとは勿論思つて居ないのである。寧ろ吾人をして

言はしむれば、そんなことがあらう筈がないのである。であるから平氣で自由主義を説くのである。極端な言辭さへ用ゐるのである。否々自由主義の幼児教育では、恐らく干渉主義よりも一層教育者に重きをおいて居る。一層教育者に信頼して居る。

論理的教育法を拒げるのは、論理に據つて人に據らぬからである。賞罰の弊害を極論するは、規則に據つて人に據らぬからである。細々しい教案主義を批難するのは、教案よりも人に全任せんとするのである。之れを要するに眞の自由主義は、理論的には幼児を主體とし、其の自然なる自由なる發達を、どこ迄も尊重するといふにあるけれども、實際的には教育者の知識、人格に全任せようとするのである。

人を信頼し、人に全任してこそ、自由の意味があるのである。教育上の自由主義の意義が成立するのである。干渉主義の人の方が餘計はたらい

自由主義の人は無爲で居るのだと思つたら大變の間違ひである。自由主義の方が、教育者としての眞のはたらきは、實際多大なものであらざるを得ないのである。

放任と自由とを間違えてはならない。放任は教育の範圍外のことである。教育である以上は必ず何等かの非放任である。

自由とは教育的立案の内に於ける放任である。非放任から、直ぐ束縛へゆかないのである。放任と束縛との兩極端の間には、廣い餘地がある。之れが即ち自由の境である。少くも教育上の自由主義とは、こう解せらるべきものである。而して自ら發達する驚くべき力と自分の法則とを有する幼児等を、一人々々、此の自由の境に放つのである。此の自由主義の牧養者は、獸を狭い檻の中へ強ひ鎖で縛りつけておく番人よりは、どんなにか多忙に、どんなにか骨が折れるか分らない。

而して自由主義幼児教育は教育者に、この多忙と、この骨折りに堪え得る資格と眞の技倆とを要請して居るのである。

### 設備上の理想と簡易

吾人は、今すぐ出来る出来ないの伸尺を度外して、斯うしたらよい。斯うした方がいゝ。斯うして貰ひ度いと思ふことを随分澤山言つた。勿論、根から出来ない相談のことは言はない積りであるが、理想を逐へば欲望が其の上へくと昇る。併し斯く理想を説くは目あてを語るなのである。幼稚園の設備を理想的にし度いといふのは誰れも願ふ處である。しかし實際上に經費その他の都合からそれが容易に出来ないのである。斯うもし、あゝもしいふことは誰れも知つて居る。疾くから氣がついて居る。たゞ、外の事情から出来ないのである。

設備上の理想論は、斯ういふ幼稚園を批難するのではない。私の處ではといふ一つ一つの具體的實際に對しては、たゞ少しでも此の理想に近づいて貰ふ様にし度いと希望し、期待するばかりである。理想論を提げて、不足不平を言ひ散らすものではない。もしそんなことがあるならば、吾人の理想論は甚だ有害なものである。少くも不穩當なものである。

吾人は理想論を説くと共に、實際上にはどこ迄も簡易主義を主張するものである。殊に經費の少ない今日我國の幼稚園に於ては、そうしなければならぬ實際の要求なのである。

しかし、いくら簡單幼稚園として、教育上の犠牲を拂ふことは出来ない。幼稚園として、之れだけ必要な自ら信ずる程度迄は、自ら要求の起るのが當然である。簡易主義は消極主義ではない。出来るだけの範圍内の、張りつめた積極主義で

ある。

少い經費で、出来るかぎりの理想に近づかうとするには、金の力を他の力で補はなければならぬ。他の力として別にはない。人の力である。まめな働き、熱心な工夫、巧妙な節約法。これが簡易幼稚園の資力である。金も不足、此の三資本も不足ならば、幼稚園に何の進歩のあろう理がない。簡易な幼稚園といふよりは、甲斐ない幼稚

## 子供の盗み (二)

五 子供の盗みには、或特別な動機があつて、それが爲めに直接若しくは間接に起る場合がある。これは前に述べた場合とは異なり、必ずしも一般に起

園といはれなければならない。

今年も然り、來年も多分然り、吾人の理論上の研究は、いつでも理想主義になるであらう。しかも、吾人の實際には、此の理想に近い幼稚園設備を、如何にして簡易に作り得べきかといふにあらなければならない。斯ういふ前提、前約のもとに、吾人は無頓着に理想論をするのである。

文學士 寺田精 一

るといふのではない、子供の個性に於て、或事が特別に發達して居る爲めや、其圍境界よりする特別なる條件の爲めに、盗みが行はるゝのであつて、以上の場合よりは多少其形式に於て複雑なるもの